

〔研究ノート〕

## 〈スピ・シン主義〉的な 個人の生き方を考える(5)

伊 田 広 行

### 要旨

〈スピ・シン主義〉は、個人的生き方に社会貢献が組み込まれるべきことを提唱する。だがそれは義務感・禁欲主義であってはならず、自分の個性に見合った日常生活と社会貢献のバランスを作り出すというアートの的なものでなくてはならない。ひとりひとりが抵抗し、文句を言い、負担する責任をもった主体になる社会が望ましい。秩序を内面化した者たちがそれと気づかない社会こそが恐ろしい。各人が自由を希求するアナーキストになることこそ希望である。

## 目 次

1	総論	
2	やりたいことをやる	……以上, 53巻6号
3	スピリチュアルな身体性	
4	人間関係	
	……略……	
	人生には暗闇がある まで	……以上, 54巻1号
	他人だけをけなすな から	
5	こんなふうに住きたい	……以上, 54巻2号
6	コミュニケーションと〈孤独〉	……以上, 54巻3号
7	社会貢献……以下, 本号	
	「善」を社会的に捉える	
	非禁欲主義で、日常生活と社会貢献のバランスを	
	抵抗し、文句を言い、負担する責任	
	統治と自由とアナーキズム	

キーワード：素朴, 非禁欲主義, 想像力の所産, アナーキスト

7 社会貢献<sup>1)</sup>「善」を社会的に捉える

私は〈たましい〉という概念を打ち出しているし、「善く生きる」という表現も用いる。これは、「きれいな心」とか「善」というものを前提にした近代主義的なものではないかという批判を受けうる表現であることを自覚している。だから、「脱近代のバランス」として、「脱物語の後の物語」と位置づけている。それについてもう少し言及しておこう。

まず、「道徳」は、絶対的善悪（その時代における権力の秩序の内面化、近代価値観や宗教を基準にしている）でものごとを決めつけるという意味では愚かなものである。それは「善をしなければならない」「悪をしてはいけない」というように、社会からの具体的強制であり、禁止・禁欲であり、他律であり、自由抑圧に過ぎない。

それに対し求めるものは、社会が決めるのではなく、ホリスティックな全体的関連を背景にしつつ、自分が決めること、すなわち自律、自由である。基準は、〈たましい〉である。それは形を決めつけず、各人の内的な奥深い声から出てくる自由なものである。

その上で言うが、「脱物語の後の物語」視点としては、再び「善」「きれいなもの」という概念を用いる。それは、無自覚な近代主義を相対化する視点を常にもつ自信——所詮〈たましい〉という概念も私の幻想に過ぎないという自覚——があるからであり、立場を限定した上で、自分にとってとても大切なものを表現しているというチカラをその概念に感じているからだ。さらに、人間が、地球上の全存在が、その存在のありかた（つながり）に規定されて、もってしまうもの、すなわち生態系の部分として存在するということに対応した観念であると自信をもつからである。それを感じとり、反映させるところが〈たましい〉であり、私の生きるエネルギーの源でもある。だから、ここでいう〈たましい〉において、禁欲・他律・自由抑圧はない。

ただし、自動的に全人類皆がこの〈たましい〉と結びついた意味での「善悪」への直感を有しているわけではない。多くの人に、善悪への直感は有されているが、それは程度問題であり、様々な制約や近代主義的の道徳側面や市場的価値観と混合して存在している。「善」を固定的に捉えた上で普遍的なものということではできない。幅のある方向性程度概念であり、人によって、思想によって、立場によって、時代・文化

1) 個人の生き方と社会貢献のかかわりについては、ここに述べただけでなく、〈スピ・シン主義〉として考えているすべてのことと繋がる、私にとっての最重要問題である。拙稿 [2003a], [2003b], [2003c] を参照の上で、総合的に理解していただきたい。

によって「善」の内容は異なる。だから、その「善きもの」と重なるところの多いスピリチュアル度は、人によって異なるとしている。

「善を善と知っていて、それを欲しないということはない」と池田晶子さんはいうが、私の言葉で言うなら、人は、スピリチュアル度の程度に応じて、「善」を喜んで行う。その意味で、私には人類に対する希望がある。しかし、過度の期待はないし、それは強制するものでもない。各人が、気づくものであり、直感するものだが、同時に、社会環境によって人は大きく変わるし、スピリチュアルな行動がとれるような社会制度や教育システムに変えていくことなしには、現代の市場・競争社会の中で多くの人はスピリチュアル度の低いままであろう。私はそこを問題にしようとしている。

多くの日本人が「人のためとか善など偽善だ」というふうにしかなるがみえなくなっている。スピリチュアルな視点、すなわち〈たましい〉が心の奥深くで感じられていないからだ。それは哀れである。そのとき、ただ、運命論的に、「善な人は善を為すが、そうでない人は為さない」という現状の説明だけをしていてもはじまらない。それは善悪の概念の自家中毒にしかすぎない。その〈たましい〉が出現し、見えやすくなり、多くの人の〈スピリチュアル度が高まるように、社会的状況を変えていく実践という形で、「善」を社会的にとらえる必要がある。その第一歩は、私やあなたがどう生きるかだ。

#### 非禁欲主義で、日常生活と社会貢献のバランスを

拙稿[1999]でも強調したように、日常生活における自分個人の楽しみや快楽を禁欲主義的に否定することは、まったく間違いである。むしろ、日常におけるささやかなできごとや生活そのこと自体を楽しむ能力、とくに世間・メディアの洗脳とは独自に、自分なりの独創的な快適さの追求が必要である。俗っぽさ、庶民性を忘れず、自分もそれを楽しむこと。例えば食事、おしゃべり、会話、笑うこと、がーと感情を表すこと、眠ること、家事をすること、子育てをすること、本を読むこと、歌を歌い、映画を見ること、ファッションを楽しむこと、買い物、散歩等等、いろいろ楽しんで、人間ってなんてキュートなのだろうとおもうような心の余裕である。

もちろん、それも追われるように行うのでなく、子どもと遊ぶときや恋愛の楽しいときの気持ちのように、頭でなく、心で、身体で自発的にその一瞬一瞬をスローモーションのように味わって楽しんで行うことが大切である。言い換えれば他人の目や計算がないような、神話的な、「樹木の時間」のような次元でそれを行えばいいなと思う。わかりやすく言えば、〈スピリチュアリティ〉の水準で、自分や親しい人との身近な楽しみを素朴<sup>2)</sup>にかつ創造的に大切にしつつ、同時に、労働やNPO活動等を

通じて社会的にいいことを少しすればいいといえると思う。平和とか優しさを実現させたいなら、嘆くのではなく、それを身近な生活から実行すればいいだけなのだ、という気づき。

私の場合でいうと自分のタイプや自分に欠けていた面を考えて自分を変えたい方向を考えると、これまでの学問や運動スタイルはもういやだという感覚がある。前はそれでもやらなくっちゃダメだという「大所高所的発想」「義務的・禁欲的な面」があったが、だいぶ考え抜いて、個性ある自分の生き方としてそうしたことをはっきりと突き詰めてもよいのだと思えるようになってきた。大切なこと、すべきことはいっぱいあるが、何もかもをすべきなのではない。自分としてそのうちひとつでもいいからちゃんとやればいいのである<sup>3)</sup>。そのとき、日々をどういう質で生きるかがとても大事になってきた。

自分が元気に生きていくには、「しっかりしているとか、努力しているとか、リーダー的であるとか、マジメであるとか、優等生的であるとか、組織に従順とか、自己犠牲的に社会運動に時間を割いているとか」に囚われてちゃダメだ。もっと自分の「弱さ」をみて矛盾していたりいい加減であればいいと思う。だが、「繊細になり弱くなる」としんどくなりやすい。だから自分を過度に追い込まないように気楽に生きることが大事。非スピリチュアルで、攻撃的で大雑把で義務感で無理するような「政治なるもの」(その他、いやなもの、私の心をかき乱すもの、いやな人・組織)から離れることも大事だ。離れるということの大事さは、もっと日本で強調されていい。

ただし、やはり社会との関係は〈スピ・シン主義〉としては非常に大事な課題だ。新しい社会運動の考察(拙稿 [2003b])においても述べたが、私たちが生きていく限り、この繋がった地球社会のうえで生きていくのだから、人は皆必ず、いろいろな偶然、試練、喪失等を通じて、「世界のつながりと自分の生きがいと自分にできること」を考えるその問いに向かう契機を与えられる。私たちひとりひとは「断片」にされているが、それでは満足できない、今の社会のままでいいわけがないという「声」

- 
- 2) 「素朴」は都市的効率主義においては田舎臭く、劣ったものとみなされてきた。だが、〈スピリチュアリティ〉の視点からは、ぐるっと1回転し「帰還」したあとの「素朴」はすばらしいといえる。素朴はスロー的価値観のひとつである。
- 3) 拙稿 [2003a] [2003b] で検討したように、私にとっての「なにかひとつ、ちゃんとしたこと」は、私なりに〈スピ・シン主義〉的意識を広げる活動をしたとか、何か実際にしつとりとスピリチュアルな関係を結ぶような人とかかわりをしたいといったことである。

はあらゆるところから聞こえてくる。その「声」は微細だが、想像力の助けがあれば聞こえる。想像力こそが、人がやさしくなることと連帯の基盤だ。自分には直接関係ないと無為を選びとる人は、この世界の社会問題を解決しないまま放置するという行為によって、「問題のある現状世界」を構成している。それが見えないのは想像力の欠如だ。

それに気づいて、想像力をもって繊細に耳をすまし深めれば、どこからでも、自分なりの方法で、この地球・社会（環境、他者）に変化を与えることができる。だから生活（個人的な仕事、家のこと）に追われて、それを言い訳にして、大切な問いを自分に向けない生き方でなく、自分を大事にするためにも、自分を取り巻く大きなつながりを意識して、世界に対して生きている間に何ができるかを問う生き方をしていきたい。禁欲主義や義務感でなく、むしろ積極的意欲として、チャレンジングなものとして、社会貢献をどう自分の人生に組み込むかという課題はある。精神世界などといながら社会性（緩やかな意味での政治性）のないものはまがい物である。

その「社会」（広義政治）の身近な表れが他人であり、他人・他者のためにすることは、多くの場合自分の喜びになる。「被差別者」に出会うとは、社会構造としての抑圧に出会うことであり、自分のなかの差別性や被差別性に出会うこととなる。それにどう向かえばいいかが見えてきたときが、〈たましい〉の視点でもって他者とのかわりを見ることができるということである。そしてそこまで至れば、その気づきや視点自体がふわーと温かい幸せな感覚であるとわかる。エンパワメントとは何かがわかる。自分が元気になるということは、他の人との関係への積極性と表裏一体である。このシンプルなことに気づくことが〈スピリチュアリティ〉への覚醒の鍵である。

また人生にはいろいろ起こるので、こういう場合ああいう場合はどうしようかと考えておき、なにかに直面したときは勇気を持って行動できるように、誇りを持てる行動をできるようにしておくことも大事である。汚いことや暴力がはびこる社会なので、汚いことに免疫をつけておくことが大事である。自分の日常行動を振り返って判断するとき、大事なりトマス試験紙は、自分の子ども・非常に親しい人（恋人、パートナー、配偶者）、親友にそれを話しても恥ずかしくないか、むしろ誇れるかってことだろう<sup>4)</sup>。この問いこそ大事にしたい。そのような発想で生きてこなかったがゆえに

4) この問題は、社会問題にかかわることに疲れてしまう問題（バーンアウトの問題）にも関わっている。すなわち、社会の変革には森田ゆりさんの言う「ビジョンとポリシーと実践」のトライアングルが相互作用的に必要であるが、バーンアウトしそうになるとき、そもそも根本的に

〈たましい〉などが見えなかった人に、私たちはその水準で語っているのだということ伝えることが重要だ。

また、私たちは死すべき運命にあるからこそ、「死ぬ準備」として生きていくという発想を持ちたい。先述したように、死を抽象的に考えたり恐れるのではなく、生かされている間にやるべき事をやろうという視点は、断片でなく、社会的に生きるという前向きエネルギーになっていく。死を入れてこそ、私たちは、自分が社会の一部として生かされているということがわかるのだ。

### 抵抗し、文句を言い、負担する責任

私たちが社会性をもって生きるというとき、自分の身に降りかかってきた問題に対し、諦めるのではなく、文句を言い、抵抗し、同じような不正が今後続かないように改革していく責任を果たすということがある。

例えば、「経営悪化で首になったのだから仕方ない」などというよくある反応を減らしていく責任がある。なぜ自分がこうも簡単に切り捨てられるのかと考え、争う。そこに尊厳の回復、企業社会に従属していた自分からの脱皮の方途がある。今まで、企業が女性や非常勤労働者の使い捨てを行ってきたことに自分が鈍感であったことへの反省となる。それをする人間になることこそが希望である。

なにも会社にしがみつけというのではない。今までがしがみついていたのだ。世界観ごと、狭く分断され、愚かだったのだ。ネクタイや名刺に自分を売ってきたのだ。リストラや過労死からそれを学ばず、ただ受身的に会社のいう通りに使い捨てられ、また再就職を探して、その次の会社で首を切られないようにまた会社の言いなりにがむしゃらに働くのでは、何の解決にもならない。

「働く、生きる、暮らす」とは何かを根底から捉えかえし、ワークシェアリングで、皆で分け合う、賃金を下げても、企業に従属せずに楽しく暮らす。そういう主体となるためにも、解雇と闘い、これからの自分の人生の再設計をしていくことが求められている。現在を生きるようにしか、未来は生きられない。

---

私は何をしたかったのかという、自分の熱い想い（理念＝ビジョン）に立ち戻ることができれば、揺らぎは減るであろう。ここでいう、「身近な人に恥ずかしくない生き方」というのも、そうした根源的な自分のビジョンのひとつである。

ついでに、森田ゆりさんがバーンアウトしないための心構えとして語っていたことを紹介しておこう。社会を変えることはできるし、けっして諦めないが、そう思えるのも、常にビジョンを確認するからということに加えて、100の変革目標のうち10が達成できれば大成功というようなリアルな考えをもっているからである。また10～30年後、さらに次の世代まで入れて考えるという長期的視点があれば、短期的に変革が成功しないことにも絶望しないと彼女は言う。



企業や政治家に不況をなんとかしてくださいと嘆いたりお願いしたりするのはダメだ。ましてや、赤字国債発行によるばらまき不況対策の繰り返しを要求するのでもダメだ。それで時間稼ぎして、それで自分の首が当面繋がっても結局、また社会的に弱いところから切り捨てられていくだけであり、累積した赤字国債返済のために更に大きな社会不安を準備しているだけだからだ。

〈スピ・シン主義〉は、そうした目先の利益に踊らされる「現実主義」を否定する。根本的な解決策を一人一人が考え、それを実行していくことを求める「理想主義的」思想だ。簡単ではない。簡単な道などありはしない。右肩上がり成長という「愚民政治を続ける基盤」がなくなったことは幸いである。

〈スピ・シン主義〉的に覚醒した個人は、税などの大幅な負担増を喜んで承認する。しかし、同時に現実の官僚的・間接的な政治、特に税が何に使われているかわかりにくく、日本の政治家・官僚のダメサを考え、新しい分権政治、脱政治的な政治を考えるならば、自分との「距離が遠い」税負担というつながり（貢献）ルートだけでは、決定的に足りないと思う。

むしろ、体を使い、直接出向き、相手の顔がみえて、体で感じるような、そういうつながりの回復が大事だろう（NPO、ボランティアなどへの参加、アクティビスト化）。税負担するとしても、それが「生きた負担」と感じられること、つまり、何のために負担しているか、どこに有効に使われているか実感できること、自分が必要とされていることがわかることが大事だ。自分が税を払ったり、ボランティアや市民運動を通じて直接的に社会・他者に貢献することで、社会が変わっている、人のためになっていると実感できることが必要だ。そのためには、身体を使い、実際に喜ぶ人と触れるような「近さ」が必要だろう。

〈スピ・シン主義〉は、経済成長自体を目標とするのではなく、非成長の中での「新しい豊かさ」を創造していく試みである。誰かの役に立つ人生は、満たされるのである。

### 統治と自由とアナーキズム

さらに、「統治と自由」について考えてみることから得ることは多いのではないだろうか。例えば、あからさまな抑圧制度がなくとも、個人の心を窒息させることで統治するということができるという事実。平均的な人間が心に持つ臆病さや世論によって個人の自由を抑えることができるという事実。逆から言えば、真の自由な思想は抑圧によってつぶすことはできない。無視することによってのみつぶせる。個人が考えることを放棄・拒否し、世の中を変えることを放棄することによってつぶすことが

できる<sup>5)</sup>。

この事実が教えてくれるのは、私たちの自由は、目に見える暴力で抑圧されているのだろうかということだ。そうではなくみずから首を絞めて「心を窒息」させているとしたら？ 考えることを放棄し、お互いが「世間並み／平均／普通」という名の怪物を作りながら同時にそれにびびっているとしたら？ この道（この秩序、この常識）しかないと思ひ込んで、別の道を見ないようにしているとしたら？<sup>6)</sup>

それに対して〈スピ・シン主義〉はその反対を志向する。汚い社会だからこそ、自分はどうか生きののかを考え抜くこと。一般論はなく、具体的に細部に絞り込んで考えて、行動すること。船室から出て甲板に立ち、マストに登り、目にみえない境界線を超えよう<sup>7)</sup>。「アイルランド人ってのは、白人の中の黒人であり、ダブリン人はその中の黒人なんだから、俺たちは黒人の中の黒人で、だからジェームズ・ブラウンばりのブルースだ！」<sup>8)</sup>ってというような自由！ 無視され、無化されることを自ら切り裂くようなスタイルこそ自由なんだってこと。

「教えてもらう、リーダーについていく、暗記する」のでなく、組織もリーダーも否定し、権威を学ぶ修行を否定し、本を読み、語り合い、偶然の出会いを大事にし、具体的問題の解決を実践し、繊細に考え続けることを僕は、提唱する。〈スピ・シン主義〉が「正しい」と「教える」のでなく、あなたがスピリチュアルな単独者になりなよと、オープンに開くことを提唱する。教祖・指導者・教師にならない。それらを持ち上げない。誰も教えない。材料の問題提起をし、破壊し、疑い、創造の出発点に立つのだ。

最後に、「きれいな心」とはいうものの、そうした「善的なもの」は自動的永続的に存続するものではなく、ときには「悪」に転化することなども忘れてはならないだろう。つまり真の自由（善）のためには、常にチェック、闘争、批判、変化が必要ということである。「腐敗した善から立ち昇る悪臭ほど胸の悪くなるものはない」<sup>9)</sup>。批

5) ル＝グウィン [1986]『所有せざる人々』215ページ。

6) 「驚くなかれ、我々はそうとは知らぬ間に、いともたやすく一本の道を歩くようになり、自分の道を踏み固めてしまう。」ソロー [1995] 下、274ページ。

7) 「私は一等船室に閉じこもって旅をするよりも、平水夫としてこの世界のマストの前に立ち、甲板上にとどまりたいと願っていた。……もし人がみずからの夢の方向に自信を持って進み、頭に思い描いたとおりの人生を生きようと努めるならば、普段は予想もしなかったほどの成功を収めることができる……その人は、目に見えない境界線を乗り越えるようになるだろう」ソロー [1995] 下、276ページ。

8) 小説、映画『ザ・コミットメンツ』より



判, 変化, 対立のない社会は病んでいる。「協力」や「連帯」が服従に変わっていないか, 社会的良心が制度・機関になっていないか, 優しさが「博愛という名の傲慢」になっていないか, タテマエが個人の多様性を押し殺していないか, そういう視点で常にチェックし監視することが必要である。常に個人が批判的にみていくことが必要である。

どんな社会も組織も, 完成し, 固定化されると腐敗していく。永続性は官僚主義を生み出す。生まれつきの「完璧な人間」などいないこと, 人間には闇があることを忘れてはならない。自由のためには, 常に社会に緊張関係が必要であり, 自由のための教育をしなくてはならない。教育が硬化現象を起こし, 道学的になり, 何もわからないまま従う人間を作るものとなってはならない。「平等や連帯や人権や民主主義」などの言葉を法律であるかのように丸暗記して唱えてはならない<sup>10)</sup>。

教育とは, 安全と逃避でなく, 反逆し批判することを含む自己決定と自立の自由を教えることである。つまり, 〈スピ・シン主義〉が示唆するのは, 各人がアナキストになることが重要だということである。そして, きれいごとにならぬよう, 図太く, 自由に, 想像力をもちつづけよう, 祈るように自分の頭の芯で思考しようということである。「真実とは想像力の所産」なのだから<sup>11)</sup>。

## 文 献

- 古田晴彦[2002]『「生と死の教育」の実践』清水書院  
 伊田広行[1997]『樹木の時間——もう鼻血もでねえ』啓文社  
 ——[1999]「スピリチュアル・シングル——生き方と新しい社会運動の新しい原理を求めて——」『大阪経大論集』50巻第1-3号  
 ——[2002]「新しい人権へ」『大阪経大論集』53巻第2号  
 ——[2003a]「〈ぎりぎり〉の実践へ——自分の振り返りと現在とこれから」『大阪経大論集』53巻第5号  
 ——[2003b]「新しい社会運動の模索——〈スピ・シン主義〉視点からの考察」『大阪経大論集』53巻第5号  
 ——[2003c]『スピリチュアル・シングル宣言』明石書店  
 石垣りん[1971]『石垣りん詩集』思潮社  
 池田晶子[1991]『事象そのものへ!』法蔵館

9) ソロー [1995] 上, 132ページ。

10) ここで記述した「硬直した官僚的社会的問題」は, ル＝グウィン [1986]『所有せざる人々』(217-9ページ)の「オドー主義社会」におけるマイナス面をもとにしている。

11) ル＝グウィン [1978]『闇の左手』9ページ。

- [1998]『残酷人生論』情報センター出版局
- [1999]『魂を考える』法蔵館
- [2000]『考える日々 Ⅲ』毎日新聞社
- 北原みのり[2000]『フェミの嫌われ方』新水社
- 古宮昇[2001]「豊かさとしあわせ」大阪市教育委員会編『平成13年度 大阪経済大学市民教養講座』
- [2002]『しあわせの心理学』ナカニシヤ出版
- 倉田真由美[2001—2002]『だめんず・うぉーかー①～④』扶桑社
- ル＝グウィン[1977]『さいはての島へ ゲド戦記Ⅲ』岩波書店（[1972] The Farthest Shore）
- [1978]『闇の左手』ハヤカワ文庫（The Left Hand Of Darkness, 1969）
- [1986]『所有せざる人々』ハヤカワ文庫（The Dispossessed, 1974）
- [1992]『夜の言葉：ファンタジー・SF論』岩波書店（85年サンリオ社版の改訂版）（The Language of The Night, 1979, 1989）
- 森田ゆり[1994]『子どもに会う：体験的子ども論』ブックレット生きる No 16, アドバンテージサーバー
- [1995]『子どもの虐待』岩波ブックレット No 385, 岩波書店
- [1999]『子どもと暴力』岩波書店
- [2000]『多様性トレーニングガイド』解放出版社
- [2003]『しつけと体罰』童話館出版
- オコナー, フラナリー[1998]『善人はなかなかいない』横山貞子訳, 筑摩書房（Flannery O'Connor, A Good Man Is Hard To Find）
- ピクマル, ミシェル編[1996]『インディアンの言葉』中沢新一訳, 紀伊国屋書店（Michel Piquemal, Paroles Indiennes）
- さくらももこ[1995]『コジコジ①～③』ソニー・マガジズ・コミックス
- ソロー, ヘンリー・D[1995]『森の生活（上）（下）』飯田実訳, 岩波文庫（Henry David Thoreau, Walden, or Life in the Woods, 1854）
- 鈴木康明監修[2001]『“生と死”について考えよう！』学習研究社